

第Ⅲ章 付 論

第1節 泥塔研究の流れ

萩原 三雄

本節では、仏教的営為の所産である泥塔の調査研究が、今日までどのような過程を経てきたのか、その一端を把握し、権現堂遺跡の泥塔研究の参考に資することを目的とする。

泥塔は、比較的古い段階から注目を集め、さまざまな方法で調査研究がなされてきた。しかし詳細に追うと、研究の流れはおよそ三期に分けることができそうである。第一期は、明治33年の江藤正澄氏の発表以後、石田茂作氏による「土塔に就いて」の論稿を経て、昭和1桁代の時期である。この時期の研究は、泥塔の初期の論稿らしく、出土地の紹介に重きがおかれているものの、泥塔の性格や歴史的意義についても積極的に論究が加えられていることに特徴がある。

明治33年の江藤正澄氏の「土製の⁽¹⁾小塔」はその最も初期の報告で、小論ながらも、奈良県東大福寺や和歌山県大同寺のほか各地域から出土する泥塔を紹介し、「土中に埋め、又は地上に建て供養をなす時は、無量の功德を積み冥福を得る」となし、泥塔の性格についての確かな見解を述べている。これよりしばらく時をおいた大正13年には、島田貞彦氏によって「近江國栗太郡石居発見の土塔⁽²⁾」が発表される。滋賀県大津市田上石居町にある在原寺跡から出土した泥塔を紹介し、泥塔が「二枚型から製作」されており、泥塔の底面にみられる小孔は、陀羅尼經を納入するためと示唆するなど細かい観察をおこなっている。また、奈良県を中心としてその段階で知られている泥塔出土地をあげ、泥塔は「供献物」であり、「功德と冥福とを得るものであった」とし、江藤正澄氏の論にならい、さらに「当時の特権階級の人々の弘願の対象とした立体的の小記念物に外ならぬ」と泥塔供養をおこなった階層についても論じているのは興味深い。翌大正14年にも大西源一氏によって「伊勢立野発見の土塔及経塚遺物⁽³⁾」が発表されるが、これらをうけて昭和2年には石田茂作氏の「土塔に就いて⁽⁴⁾」という本格的な泥塔にかかわる論文が世にでる。石田茂作氏は、中国・朝鮮・日本各地の泥塔を紹介しながら、特に考古学的手法による形式的分類をおこない、円塔・宝塔・宝篋印塔・五輪塔など多岐にわたる形状をもつ泥塔の考察を進めている。また、「宝塔型は平安中期以後、五輪及宝篋印塔は藤末乃至鎌倉初期以後に於いて創められた」として、さらに「勝善業に對しての量的考へ方の最も盛んであったのは藤原時代から鎌倉初期にかけてでありますから、かゝる土塔の造立も亦その頃では無いかと考へらるゝ」と述べ、平安時代の末ごろから鎌倉時代にかけて盛行した仏教的営為であったことを推察している。氏はさらに、形状、特に底部の小孔の有無や、塔身の種子の有無についても論究し、存在するのが正形で、存在しない例はその略形と位置づけている。これに関連して簡略化された形状の泥塔についても、略形としていいる。なお、泥塔と宗派との関係について、塔とのかかわりの強いこと、宝塔形という形状の泥塔が多いこと、さらに泥塔が瓦經分布地と一致する例が多い点などをあげ、泥塔と真言宗との結びつきの強さを指摘している。このように、石田論文は、泥塔の形状など特に考古学的手法に立脚して論究し、いくつかの重要な指摘をおこない、泥塔研究を飛躍的に進展させたことに大き

な意義を見いだすことができる。

つづいて、昭和6年には大脇正一氏の「泥塔考」⁽⁵⁾、昭和7年には中村直勝氏の「湯川山法光寺」⁽⁶⁾、さらに同年の矢追隆家氏による「宮古及東大福寺より出土せる泥塔に就て」⁽⁷⁾が順次発表され、このころ泥塔が多く研究者に注目されていることがわかる。また、大脇正一氏の論稿に見られるように、土塔という名称が泥塔と呼びかえられており、以後この名称がながく定着していくことになるのである。大脇正一氏はさらに、泥塔には、「竈に入れて焼上げたものと、天日にて乾固めた泥そのまま塔形にしたものとの二種があって、胡粉を塗れるものと塗らないものとある。」と述べ、焼成を加えない泥塔が存在することを類例を示しながら指摘した。この指摘について、のちにはほとんど論議の対象とならないが、焼成されない泥塔についての検討は今後の研究の重要な課題のひとつとなろう。

明治の末年から大正、昭和初年に至るこの時期の泥塔研究は、以上のように、初期の論稿らしく、泥塔出土地の紹介に力点がおかれているものが多いが、泥塔の性格論議にかかわったものもあり、さらに石田論文はこの集大成のかたちで、泥塔を多方面から分析し、その諸様相の解明に意欲的である。以後、石田論文に追随する論稿も多いが、それだけこの時期の泥塔研究は、石田茂作氏の影響のもとにあったと言っても過言でない。

昭和11年、「土版塔婆に就て」⁽⁸⁾が太田陸郎氏によって発表される。この土版塔婆、すなわち、偏平な泥塔に関しては、すでに前掲の中村直勝氏の報文中でもその存在を指摘されていたが、1. 平板であること、2. 五輪或は宝塔、宝篋印形であること、3. 表裏側面何れかに梵字種を置くこと、4. 素焼であること、5. 出土品であって多数一個所に存在すること、という定義を付し、泥塔との関わりの中で意義を述べている。偏平なるがゆえに、当然のように製作や運搬が容易であり、経済性も良く、したがって、泥塔の普及がこうした偏平の泥塔を生みだしていったと考え、「経塚にあって瓦経から又一字一石経に転化した事実と併せ考へる時、土塔と土版塔の觀念も同種の移推と類推すべきであらう。」と述べた。経塚が後世、一字一石経を生みだしていく過程をたどるように、偏平な泥塔も、泥塔中で時期的に後出し、形式化の所産ととらえたのである。太田氏のこの論稿は、泥塔のなかでも特異な存在である偏平な泥塔を真正面から論じたもので、石田論文を始めとしてそれ以前の論稿ではあまり注目されなかったもので、泥塔の多様性や、さらに経塚との比較の中から泥塔の変質の過程をながめようとしたことに大きな意義が見いだせる。

昭和13年になると、後世、泥塔研究に大きな影響を与えつづけ、研究の基礎を築いた論稿が相次いで発表される。前述の太田論文に加えて、これを泥塔研究の第二期としたい。まず、4月に公表された肥後和男氏の「日本発見の泥塔について」⁽⁹⁾では、全国の泥塔出土地32個所を一覧表で提示しながら、泥塔は広く全国に分布しており、全国的におこなわれた供養であること、さらに分布上からは奈良、文献上からは京都を最多とすると述べ、多くの文献を駆使しながら泥塔の出現や歴史的意義について論述している。また、泥塔の記述が見える文献上の記録37点を示して平安時代の末期に盛行をみる仏教思想と位置づけ、院政時代での泥塔供養の第一の目的は延命であった可能性も指摘している。『阿婆縛抄』や『醍醐雜事記』の記載にある造塔の次第から、造塔にあたって用意すべき中味を詳しく分析するなど、文献上に見える泥塔をさまざまな角度から検

討しているのである。このような泥塔供養の盛行を、氏は「信仰を数量的に外面化するといふ藤原時代の一般文化形態の中に之を位置づけ」ながら、「貴族精神の表現」と歴史的な意義づけを試みたのである。5月に発表された日野一郎氏の「我が國に於ける小塔供養の推移」⁽¹⁰⁾も、文献上から泥塔研究をおこなった意欲的な論稿である。氏は、泥塔供養の実態を平安後半期と鎌倉時代以後にわけてながめ、「多数の人々の手によりこれ等の小塔が造進せられて来た」ことを指摘し、さらに『兵範記』の記録から「当時毎月その始めに泥塔供養があった」ことを引きだし、泥塔供養の盛行の様子を示した。鎌倉時代以降も引き続き泥塔供養がおこなわれている事実から、「宮中或は貴族のみならずこの時代に於いては武家の有力者により盛んなる造塔業が行はれて来たのであった」とし、供養の内容も、追善や病氣快癒・安産など現実的祈願に加えて、「政治的意義」をもつものもあらわれていることを指摘している。「貴族に准すべき社会的地位を持つ僧侶」や地域の有力者を泥塔の造進者に位置づけ、畿内以外の各地域に泥塔が広く分布する背景とした。氏は、泥塔供養を記録する多数の文献を詳細に分析することによって、興味ある事実を引きだしており、肥後論文とともに文献上からみた泥塔研究をはばまとめあげ、今日の研究にも多くの示唆を与えているのである。この時期は、以上のように、石田論文とは異なった視点と方法から泥塔研究をおこない、新たな展開をこころみたことに大きな学問的意義をみることができる。

これ以後、泥塔研究はしばらく中断され、戦後の昭和20年代、30年代に入っても特にみるべき論文、報告もない。

泥塔研究における第三期は、昭和40年代以降今日までであり、この時期の特徴は、発掘調査事例の増加と、これにもとづく考古学からの積極的なアプローチがなされる点にある。まず、40年代には、泥塔にかかわる重要な発掘調査報告書が相次いで刊行されている。45年3月の『多賀城跡調査報告Ⅰ－多賀城廃寺跡』⁽¹¹⁾と、翌3月の『六波羅蜜寺民俗資料緊急調査報告書』⁽¹²⁾で、両者とも寺院からの多数出土の泥塔の実際例として大変貴重であり、考古学的な学術例が稀少な泥塔研究にとって遺跡とのかかわりを具体的に示す好例として、こんにちでも多くの示唆を与えられている。昭和46年には、これらの資料をふまえ、石村喜英氏は「瓦塔と泥塔」⁽¹³⁾を発表した。この論稿では、泥塔の発見地45例をあげながら、分布上の多寡の問題、泥塔の形態、供養の目的等多方面から泥塔研究をおしすすめている。氏は、泥塔供養は、「すべて中流あるいはそれ以上の貴族の関与によるもので、庶民の関わりを示すものを一として存しないのは注意される」と述べ、造立主体者についての従来の見解を追認し、また供養目的を終えた泥塔がどのように処理されたのか疑問を提示しており、単独で、しかも泥塔供養の本来的な場とみられない出土状況を示す遺跡が多い点から、それらの再検討をうながした。泥塔供養後の二次的利用の状況は、泥塔研究にあたっておそらく避けて通れない課題であろう。そのほか、扁平状の泥塔は、鎌倉時代以降室町時代に盛行することなど、多くの興味深い見解を述べており、泥塔研究を総括した論稿と評価されよう。

この論稿以後、全国的に増加する発掘調査と相まって泥塔出土地もしいに増加するが、泥塔供養のありようを示す遺跡の発見は依然少なく、逆に少数で出土したり、あるいは中世の町屋等の遺跡群からの出土など、むしろ多様なあり方さえ示していく。

昭和59年には、木下密運氏の「小塔」⁽¹⁴⁾が発表されている。この論稿は、泥塔供養作法等を具体的に論じたもので「造塔延命功德経」や「覚禅鈔」「阿婆縛抄」などをもとに、造塔の手順や行事

作法を詳しく説いており、新たな泥塔研究となっている。この内容は従来の研究内容からはあまり触れられていない視点であり、泥塔研究にさらに深みを加えたといえよう。

昭和61年及び平成元年には、泥塔研究を精力的におこなっている畑大介氏によって、「泥塔の用途をめぐる一、二の視点について」⁽¹⁵⁾、「偏平形泥塔について」⁽¹⁶⁾が発表された。前者は遺跡から少数出土する泥塔に焦点をあてて、泥塔供養を終えたのちに、本来の造立趣旨とは異なった二次的な用途が泥塔には生じる事を指摘し、その視点から泥塔の分散というあり方をみようとしたもので、後者は、偏平形を呈した泥塔に関して、その分布、性格を追究したものである。また、泥塔供養にかかわる信仰形態の変化の時期が室町期以降にあり、造立主体者に、より下層の人々が加わる可能性も見いだしている。

以上のように、明治期より今日まで、泥塔研究には多くの研究者がかかわって、多方面から分析・検討が加えられてきたが、三期に大きくわけた泥塔研究に共通した特徴として指摘しうる点は、遺跡より多数の泥塔が出土した例が少ないこと、文献上知られる泥塔供養のあり方を端的に示す遺跡に乏しいこと等から、遺跡の詳細な分析をふまえて、泥塔供養の本質に触れた論稿が少ないことをあげることができる。同時にそれは、泥塔を遺跡から切り離して仏教的所産としての「物」としての観点からの考察がつよく、泥塔を通して遺跡そのものの性格などを論じる傾向が薄いことにもつながっている。

今日、泥塔出土遺跡が徐々に増加しているにもかかわらず、泥塔研究を志す研究者は少なく、他分野に比べて大きく研究が遅れているのが実情である。日本仏教史の解明にとどまらず、日本の古代・中世社会にとって泥塔供養がどのような役割を果たしてきたのか、その背景はどうか、泥塔が内包するこれらの諸課題に多くの研究者が取りくまれることを願うものである。

注

- (1)江藤正澄「土製の小塔」『考古』第1編第6号、32～35頁、1900
- (2)島田貞彦「近江國栗太郡石居発見の土塔」『歴史と地理』第14巻第3号、59～67頁、1924
- (3)大西源一「伊勢立野発見の土塔及経塚遺物」『考古学雑誌』第15巻第3号、72～74頁、1925
- (4)石田茂作「土塔に就いて」『考古学雑誌』第17巻第6号、41～62頁、1927
- (5)大脇正一「泥塔考」『東洋美術』12号、91～101頁、1931
- (6)中村直勝「湯川山法光寺」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第9冊、1～39頁、1932
- (7)矢追隆家「宮古及東大福寺より出土せる泥塔に就て」『銅鐸』創刊号、6～11頁、1932
- (8)太田陸郎「土版塔婆に就て」『史跡と美術』第7輯ノ八、9～19頁、1936
- (9)肥後和男「日本発見の泥塔について」『考古学』第9巻第4号、200～219頁、1938
- (10)日野一郎「我が國に於ける小塔供養の推移」『史観』第17冊、69～95頁、1938
- (11)伊東信雄ほか『多賀城跡調査報告』Ⅰ 多賀城廃寺跡、1970
- (12)柴田実ほか『六波羅蜜寺民俗資料緊急調査報告書』第1・第2分冊、1971
- (13)石村喜英「瓦塔と泥塔」『新版考古学講座』第8巻、188～198頁、1971
- (14)木下密運「小塔」『新版仏教考古学講座』第3巻、268～276頁、1984
- (15)畑大介「泥塔の用途をめぐる一、二の視点について」『山梨考古学論集』Ⅰ、357～371頁、1986
- (16)畑大介「偏平形泥塔について」『山梨考古学論集』Ⅱ、423～454頁、1989